

日本人中国語学習者によく見られる誤り

——具体例からの分析——

王 幼 敏

[訳] 村上 牧子

日本と中国は一衣帯水の隣国同士であり、歴史的に見ても中国が日本に与えた影響は非常に大きい。文字言語方面では、日中両国は「同文」であるといっても過言ではない。その実、両国の文字は相似しているところがあり、日本人が中国語を学習する際、相似しているが故の恩恵を被り、それがプラス面に作用する特性を有してはいるものの、一方でマイナス面での影響も大きいものがある。言語面では中国語の単語や読み方はかつて日本語に影響を与えたとはいうものの、それは古代のことであり、時を経た現代では日中の読み方は大いに異なるものとなっており、日本人が中国語の読み方を学ぶには多くの困難を伴う。日本語の構造は中国語と似たところは皆無といっても過言ではなく、日本人が中国語を話す際に、言葉の運用面でよく配列を誤り、意味をなさず、何を言いたいのかかわからないといった場面がよく見られる。筆者は外国人の中国語教育に従事して30年になるが、教えた学生の約半分は日本人であり、近年は日本の大学で教鞭をとっていることから、日本人の中国語教育の状況につき十分に把握しており、日本人が中国語を学習する際に犯し易い間違いには他国人とは大きく異なる特色があることに注目し、是非単篇でそれを述べるが必要だと感じた次第である。本文はまず発音・漢字の二方面から日本人学習者によく見られる誤りを分け分析した。

一、発音方面でよく見られる誤り

(一) 子音・母音での間違い

日本人の子音・母音方面での間違いについては、過去に何本かの論文で指摘があったものの、整理不足であり不完全であった。従い、ここで筆者

の教育実践の中で発見した何点かの問題につき整理し要約してみたい。

1. 子音

日本人は舌尖後音の zh, ch, sh を舌面音の j, q, x に発音する状態がよく見られる。例として知→机・吃→七・少→小等が挙げられる。これは日本語における発音はほとんどが舌面音と舌尖前音であり、日本人がそれらの音を発音する際に舌は基本的に伸ばしたままであるが故に、舌尖後音のような舌を反り上げ歯茎の奥につっかえ棒のように置く音は難しいと感じることになる。

中国語の中の6組の無気音と有気音の組合 b-p, d-t, g-k, j-q, z-c, zh-ch は、日本人にとって区別が難しく、よく混同してしまう。例として潘一班や他一搭が挙げられる。これは日本語には有気音がなく、清音の p, t, k であっても無気音になってしまう傾向があるためである。例えば「たたみ」という単語につき、後ろの「た」[t'a] を実際には [ta] と発し、従い [t'a ta mi] と読む、又「わたし」はよく [ua ta ei] と発する、これらは日本語の清音は実際上は中国語の無気音とほぼ同じであることを意味しており、従い日本人は習慣的に常に中国語の有気音を日本語の清音の同じ音で読んでしまうわけである。このような習慣が日本人に有気音と無気音の区別を難しくさせ、読み方が混ぜこぜになってしまう現象をもたらしている。

中国語の h[x] は舌根清擦音であり、f[f] は唇歯清擦音であるが、日本人はよくこれらを日本語の「ふ」の輔音 [ɸ] と混同してしまう。[ɸ] の音は双唇清擦音であるが、日本語には舌根摩擦音と唇歯音が無いために、上記3つの発音方法は発声の部位は異なるが発音方法は同じである。そこで日本人が中国語の子音 h 又は f を発するにあたり、発音し易い方にぶれ、結果としてすべて [ɸ] の音で読んでしまい、上記3つの区別がなくなってしまう。例えば「喜欢」は「しふあん」[ʃɸuan]・「吃饭」は「ちふあん」[tʃɸuan] と発音してしまうわけである。ここで説明しておくべきことは、日本語のは行の子音 [h] と h[x] の発音はほぼ同じであり、[h] を [x] に変えていくのは決して難しいことではなく、一般的に日本人にとって h[x] の音は比較的学び易いということである。最も難度の高いものは f[f] であり、既に中国語で会話ができる日本人学習者であっても、この音をうまく把握できず、うっかりすると [ɸ] で発音してしまうことがよく見られる。

日本人にとり、中国語の濁擦音 r[z] と边音 l[l] の区別も難しい。例え

ば「热 (rè)」と「乐 (lè)」である。これは日本語のら行の輔音は閃音 [ɾ] と辺音 [l] の間の音であり、ある時には辺音 [l] に、又ある時には閃音 [ɾ] に近く発し、特に日本語の「り」[ɾi] は中国語の r [ʐ] と似ているといったことから、r と l の混同が現れることになる。

2. 母音

日本語には e と u の音はない。日本人が e を発音する際、子音 g, k, h の後につけると、口の開け方が小さすぎるために、結果 [w] と読んでしまうことになる。例えば、「客气」の「客」(kè) が「酷」(kù) に近くなってしまう場合、zh, ch, sh のあとにつける時に捲舌の「ɣ r」 と読んでしまう場合、z, c, s の後につける時に [j] となってしまう場合が挙げられる。また u を発音する場合、よく日本語のう段の元音 [u] と混同してしまう。これらの発音はよく似ており、その区別は口形にある。中国語の u [u] を発音するとき、両唇に力を入れ丸くして前に突き出すが、日本語の u [u] は両唇を突き出さず丸くならない。日本人が u を発する時、口の開け方は大きい両唇を丸く突き出さず、その結果「う」[u] の音で発音してしまう。従い、中国語の母音 u を含む字の発音は、日本人はほとんど日本語のう段の音で発音してしまうことが多い。例えば「苦」[k'u] は「く」[k'u] に、「酷」[ts'u] は「つ」[ts'u] に、「布」[pu] は「ぶ」[bu] と発音してしまう等々が挙げられる。

日本語には i の音もなく、ほとんどの日本人は正しく発音できずによく i と混同する傾向がある。例えば「去」を「气」の音に読んでしまう等が挙げられ、そのポイントはやはり口形にあり、丸く突き出さない為に起こることが推察できる。

中国語の母音 i については 3 種類の読み方がある。1 つめは子音 z, c, s の後ろでは舌尖前元音 [ɿ] と発し、2 つめは zh, ch, sh, r の後ろでは舌尖後元音 [ɨ] と発し、3 つめはその他の子音に付く場合及び自ら音節を作るときは一律 [i] と発する。日本語には読み方を示す仮名「い」[i] がある関係で、日本人は [i] の音だけは発音できるが [ɿ] と [ɨ] の音は覚えられない場合が多い。例えば si を比較的音が近い英語の c と読んでしまうことや、最も良く見られる例として「日本」を「利本」と読んでしまうことである。これについては「日」の子音である r と日本語の「り」は発音の方法が似ているからであるとか、日本語の「り」の音は中国語の li と ri の間にある

関係で li と ri の音は「り」の音で発せられる等の分析がある。しかし、筆者の長年にわたる教育経験では、ポイントは母音の i の読み方によるものと考える。日本人は r につく i を [ɿ] で読むことを忘れて [i] で読んでしまうが、これはおそらく視覚習慣から来るものであると想像できる。というのも、日本語の「い」のローマ字表記は i であることから、日本人はペンイン文字に i がつくと無意識のうちに「い」[i] と読む癖がある。そうだとすれば、この発音の矯正は決して難しいことではなく、日本人学習者には i は [ɿ] と発することを気づかせさえすれば、すぐに正しく発音できることは間違いない。但し、この頑固な癖を根本的に直すことはかなり難しく、間違うたびに何度も根気強く指導を繰り返す必要がある。

この他、日本人はよく「知・吃・食」と「机・七・习」と読んでしまうが、これは前述の子音 zh, ch, sh と j, q, x が混同してしまう原因の他に、母音 i の読み間違いも関係あるのではないのだろうか？ 筆者は関係ありと断言できる。

日本人は時に s の後の i、つまり舌尖前音元音 [ɿ] を日本語の「う」[u] と発してしまう癖がある。例えば「四」(sì) を「す」(su) と読み、結果「苏州」の「苏」と「一・二・三・四」の「四」は、日本人の口からは両方とも「す」(su) となって発せられる傾向があり、これは注意しなければならない発音現象である。

er[ər] は捲舌元音であり、日本語にはこの種の仮名がない為、日本人学習者はこれを [a] 又は [ə] と読んでしまう傾向にあるが、これは日本人の発音習慣により舌先を巻き上げられないことに関係している。

上述の単母音以外、日本人は下記の複母音の区別も難しい。具体的には an-ang, eng-ong, uo-ou, üe-ie, iou-iong, uan-uang, üan-ian であり、これらの複母音の字については聞き取りにせよ発音にせよ、すべてにおいて混同が見られる。例えば、忙—慢・正—钟・脱—偷・学—写・有—用・忘—了・豫—园—语言等々が挙げられる。an と ang・uan と uang の混同については、日本語には 1 種類の鼻音「ん」[n] しかない為、日本人は鼻音の前と後が区別できないと一般的には言われているが、この解説は説得力に欠ける。中国の南方人も前鼻音と後鼻音の区別ができないが、絶対的にこの種類の音の混同はしない。筆者の観察によれば、日本人の口形の変化が小さすぎるのがよりの確な原因だと判断できる。言い換えれば、日本語の口形の変化が小さい為に、日本人はすばやく大幅な口形の変化が出来ず、

上記に挙げた複母音の混同状況をもたらしていると言える。

日本語の仮名の発音はローマ字を用いて表記することができる。このローマ字表記が中国語発音に与えているマイナスの影響も見逃すことはできない。例として「困难」と「結婚」を挙げると、日本人はよく「くんなん」と「じえふん」と読んでしまう。これは「困」のピンイン kun と「婚」のピンイン hun が、日本人の眼には「ku-n」と「hu-n」の2つの部分に分裂して映ってしまい、ローマ字表記の読み方でこのように読んでしまうのである。又、「很」を「へん」と読んでしまうこともよく知られている頑固な癖であるが、これも日本人が「很」のピンイン hen を「he-n」と2つの部分に分けて読んでしまい、「へん」のローマ字表記である hen から来ているが故である。

(二) 声調・イントネーションでの間違い

日本人の声調・語調方面での間違いは、目下のところ中国語教育界ではまだ十分に重視されておらず、この方面で細かく専門に研究及び論述している研究者は極めて少数に留まっているというのが実態である。従い拙文を以てたたき台としていただければ幸甚である。

中国語は世界でも有名な声調言語であるが、日本語の性質はまだ結論が確定しておらず多くの言語学者は日本語は声調言語に非ずと認識している。語学を習得する過程において、中国人は声調の作用に重きをおき、言語関連の思考経路の中でしっかりとした声調意識を有しているが、日本人は異なる。従い、日本人が中国語の発音を学ぶ際に、母音・子音は比較的覚え易くしっかりと記憶するものの、声調となるとかなり劣ることがわかる。日本人の多くは四声の掌握を難しいと感じ、声調が不正確な故に聞き間違いと書き間違いのミスを犯し易い。例として、哪一那・棵一刻・念一年・通知一同志等々が挙げられる。長谷川良一氏は下記のように述べている。「自分の40年来の中国語基礎教育の経験から言うと、日本の学生にとって最も覚えにくく安定性に欠けるのは中国語の声調である。例えば、日本人学生が単語を覚える場合、長い間安定しないのが単語の声調であり、以前学んだ単語を忘れる際まず曖昧になるのも声調である。声調以外、日本人学生は学習した単語の母音・子音については比較的しっかりと記憶しており忘れにくい。」^①これからわかるように、日本人が中国語の発音を学ぶにあたり、声調が最も安定せず、最も掌握が難しく、且つ最も忘れやす

い要素であり、自ずと最も間違いが起き易く、日本人にとって中国語の「音」を学ぶ上での最難関となっていると思われる。

中国語を学ぶ外国人にとり、声調の持つ語意区別機能と構語機能は言語のコミュニケーション機能に影響を及ぼすために、学習者が声調を避けていては中国語をマスターすることは不可能である。例えば、「四」(sì)と「死」(sǐ)・「好玩」(hǎo wán)と「好玩」(hào wán)は声調が異なることにより語意が全く異なり、使い方も自然と異なってくることになる。声調は重要であり、習得の難易度も高いが、一体どこが難しいのか？ 更に研究していく必要がある。下記に日本人が中国語を学ぶ上での声調とイントネーションの間違いと難点につきまとめて述べてみたい。

1. 単字の声調間違い

日本人が四声を発する際、いくつかの問題が現れる。

(1) 陰平調(第一声)。トーン値は55だが、日本人の発音はせいぜいで44まで、あるいは更に低いのが常であり、高いところまで届かない。

(2) 陽平調(第二声)。トーン値は35で、この音ははじめが低く後が高くなくてはいけないという特性を持っているが、日本人は24までしか上がらず、はじめが低いために上がるべきところまで音が上がらない。

(3) 上声調(第三声)。これは下がってから又上がる音であるため、一般的に日本人が最も把握しにくい音と認識されている。上声調のトーン値は214、しかし一部の日本人は324まで上がってしまう。つまり、初めが高すぎるために、中間部が底まで下げられないということである。又、ある日本人は上声調と陽平調に発してしまう。これは日本語には上がるか下がるかの2種類のイントネーションしかなく、上声調のようにまず下がってから又上がるといった曲折するイントネーションはないため、2度から1度以下がった後又4度まで上がるという上がり具合は陽平調とほぼ同じであろうという誤解を与えているためであろうと考えられる。中国の呉方言地方の人たちが標準語を学習するときにも、陽平調が上がらず、上声調が下がらないことがよく見られ、結果両者の声調がほぼ同じに聞こえ、まぜこぜになってしまうことがある。呉音は日本語の発音の源の一つであり、両者の間違いも似ていることから、この点の関連性もあるのではないだろうか。

(4) 去声調(第四声)。トーン値は51だが、日本人は31または52に発

する。下がる起点が低く偏っているか、そこまで下げられないのが日本人に共通している特徴である。これは日本人に去声調を難しいと思わせ、思い切って発音できないがために、発する時間を短くすることで不正確な発音を隠そうとすることを招いてしまっている。^②

これらの分析から見て取れるのは、日本人の発音の主な難しさが四声の高めの音の把握を正しくできていないことにあり、これは日本語に声調が存在せず、声調に対する感覚が弱いことに関係がある、ということである。但し、総体的にみて、日本人が単字の声調を学ぶにあたり、四声一つ一つについてははっきりと区別できており、語意区別機能には影響を及ぼさないことから、単字声調の間違いは日本人の発音方面での主要な問題にはなっていない。

2. 複合語の声調での誤り

正確な中国語を流暢に話したければ、単字の声調を正確に発することは非常に重要ではあるものの、更に重要なことは複合語と語句の声調を正確に発することであり、これが日本人を含む多くの外国人にとり最も難しいこととなっている。

日本人が複合語或いは語句を読む際の声調の不正確さは以下の何点かにまとめることができる。

(1) 第三声の変調。これには2種類あり、①第三声が2つ続く場合 ②第三声が他の声調と一緒にいる場合、である。①の変調については、日本人の場合は多少注意を払えば大きな問題はない。一方②の変調については日本人は難しいと感じる場合が多い。この種の変調は、第三声を半三声に読まなければならない、この「半分」の程度が日本人には把握しにくく、ともすると第三声を第二声に、或いは平調（第一声）か降調（第四声）に読んでしまう。例として、第三声＋第四声の場合、よく第三声を平調に読んでしまい、「吵架 (chǎo jià)」→ chāo jià や「手续 (shǒu xù)」→ shōu xù となってしまうこと、又第三声＋第二声の場合、よく第三声と降調に読んでしまい、「礼堂 (lǐ táng)」→ lì táng が挙げられる。

(2) 第二声が2回連続する場合。日本人はもともと第二声の上げ具合が不足している為、第二声を連続して読むとなると息切れした状態となり、不正確な読み方になるか、極めて短い読み方になってしまう傾向にある。例えば、「学习」(xué xí) の「学」が陰平調（第一声）の xuē になってし

まうか極めて短い読み方になってしまうことが挙げられる。

(3) 第一声で代替してしまう場合。日本人が複合語を読む場合、最も発ししやすい第一声が他の声調に取って代わることがよく見られる。例えば、北边(běi biān)→bēi biān・眼睛(yǎnjīn)→yānjīn・办公楼(bàngōnglóu)→bān gōng lóu・图书馆楼(tú shū guǎn lóu)→tū shū guǎn lóu・进城(jìngchéng)→jìngchēng等々が挙げられる。以上の例から、ある字を間違って第一声で読んでしまった大部分の場合は、その前後に常に第一声の字があることが関係していることがわかる。これは前後にある第一声の字の影響を受け、続けて第一声に読んでしまうことを意味しているのではないだろうか。

(4) 第四声で代替してしまう場合。日本人は読み方があやふやな場合、第四声で読んでしまう傾向がある。例えば、「词典(cí diǎn)」→cì diǎnが挙げられるが、これは日本語の音の規律が関係あると思われる。日本語の漢字には「訓読み」と「音読み」があり、訓読みの音調は多種多様であるが、音読みは多くが下がる音である。長谷川良一氏は下記のように指摘している。「漢字を音読みする場合の下降音は、日本人学生の頭の中に深く刻み込まれ、なかなか変えられない習慣となっている。従い、日本の学生が中国語を学ぶ際、そのことばの声調があやふやになると、正しい声調にお構いなく日本語中の漢字を音読みする時の下降調が決まって頭の中に浮かぶことになる。」^③

(5) 平調と降調を取り替えてしまう場合。日本人が複合語、特に文を読む場合、平調の字を降調で、降調の字を平調で読んでしまう傾向にある。例えば、「帮忙(bāng máng)」→bàng mángや「安静(ān jìng)」→ān jīng等々が挙げられる。降調にしてしまう状況は日本人と欧米人で多少異なる。欧米人は陽平調(第二声)の字を降調(第四声)に読んでしまう場合が多いが、日本人は陰平調(第一声)を降調(第四声)に読んでしまう。

この他に、日本人の発音でまだその原因が不明な頑固な癖があり、代表的な例として「毛衣(máo yī)」をmǎo yīと読んでしまうことが挙げられる。

ここで言うておきたいのは、漢字の声調を平調と降調で読んでしまうことが日本人の典型的な傾向であり、初級中級レベルの日本人の声調方面での間違いの主流となっているということである。

3. イントネーションの誤り

中国語を学習して1～2年になり、日常的な中国語をマスターした外国人にとり、声調の誤り以外にもイントネーションの誤りも日に日に突出してくる傾向がある。これは所謂「外国人訛り」と言われるものであり、コミュニケーション能力に直接影響を与えてくる。「外国人訛り」は発音の問題であり、さらには各種イントネーションに現れる誤りである。日本人のイントネーションの誤りは下記の何種類かにまとめられる。

(1) 複合語の流れでの声調の誤り。複合語の声調に誤りがあると、それが言葉の流れの中に入り、更にひどくなって、平調ばかり又は降調ばかりが強くなる形を作ってしまう。

(2) ポウズとアクセントの誤り。日本人が中国語を学ぶにあたり、中国語のポウズとアクセントをマスターしようとしても、時には声調の起伏より難しいと感じてしまうことがある、というのもこれは真似だけでできるものではなく、話し手の語感や中国語会話の流暢さにも関係してくるためである。ポウズとアクセントは、ポウズを入れる位置の誤り、区切りの長さの誤り、語句のアクセントの誤り等々を含む。これらの誤りは、文を壊し、イントネーションの表態機能を弱め、ひどくなるとイントネーションの意味表現機能を破壊し、聞く側に耳障り又は何が何だかわからない、といった悪い印象を与えてしまう。

(3) 文末と開始部分のイントネーションの誤り。中国語のイントネーションの上がり下がり変化は多くが文末に現れるが、日本人の文末イントネーションの誤りは機械的文末イントネーションと平調性文末イントネーションに見られる。前者は文末にある字のイントネーションにのみ注意を払い、全文の続き具合に注意を怠った場合、後者はすべての文末にある字の声調を平調で読んでしまうことを指す。開始部分のイントネーションは感嘆詞に表現される。趙元任氏は「感嘆詞のイントネーションには固定されたものはないが、ある程度決まったものはある。」と述べている。^④日本人のこの方面での誤りは機械的に感嘆詞の声調を発音するだけ、といった形で現れる。発音時には非常にはっきりと読むのだが、感嘆詞の文中での多種多彩な変化、つまり書面では表すことのできない重要な軽重・強弱・長短の変化といった感覚を掌握できず、感嘆詞の持つ情感を失い、イントネーションが持つべき表現力に乏しい読み方となってしまう。

日本人のこういったイントネーションの誤りは部分的には母語の影響を

受けたものであり、部分的には中国語学習時に避けて通れない問題から来ている。例えば日本人の咽喉部の発音機能が中国語の迅速で変化の多い動きについていけずに正常な速度に追いつかないといったことである。又、部分的には中国語レベルの低さから発している問題であると思われる。

(三) 中国語学習における発音教育

上述した日本人の中国語学習時の発音問題から中国語学習における発音教育についての意見を述べたい。筆者は現在の中国語発音教育には2つの誤った考え方があると感じている。

1. 「発音教育は短時間内に集中して完成させることができる」という誤解。現在のすべての基礎中国語の教科書では、発音教育が始めの10課以内に集中して設置されている。教育時間はおよそ2～4週間に設定され、教育の重点を語彙や文法へと移動させるのが早すぎる傾向にあり、発音教育に対する長期的な認識が少なすぎる。

2. 「母音子音声調教育に重要ポイントはない」という誤解。これは2つの内容を含む。(1) 母音・子音・声調の三者でどれが最も重要ポイントであるか、(2) 母音・子音・声調の三者それぞれの中でどれが最も重要ポイントであるか。現在の教材及び教育ではどれも平均的に分散されており、重点というものがない。

以上2点に対し、下記意見を述べたい。

まず第一に、発音教育の重要性と長期性をしっかりと認識すること。発音教育は語学学習の基礎中の基礎である。発音が正確で流暢であれば、たとえ把握している語彙や文法が少なくともコミュニケーションをとることはできる。逆に、発音が悪ければ、相手が聞き取れずコミュニケーションどころではない。

漢字の数量は膨大であり、同音異字・同字異音が大量に存在するため、漢字の読み方の見分けと中国語学習の過程は終始関連している。又、中国語の母音・子音・声調三者は複雑に絡み合っているために、発音教育はわずか何週間かで完成できるものではない。中国語を学習して1年程度の学生は、中国語がどんどん難しくなっていくと感じる、それらは声調・イントネーション方面の問題であり、直接彼らのコミュニケーション能力に影響を及ぼす局面にぶつかるからである。彼らは、ピンインを覚えた後、正確な発音を重視せずにいたため、所謂「外国人訛り」の癖がついてしまっ

でも、矯正したいと思ったときには多くが間に合わない。これこそが発音教育の長期性というものである。

中国語教育者は何十年にもわたり、数週間に集中してピンイン教育を行い、ピンインを教え終わることで発音教育の完成ととらえている。これは実は学生の一つ一つの漢字の「字」の読み方を導いているにすぎず、一つ以上の漢字の多音節の読み方に注意を怠り、いきいきとした会話の軽重高低やイントネーションをおろそかにした結果として「漢字」は読めるものの「中国語」は話せない、という状態を招いている。

現在はピンイン教育の段階以降、ヒアリング授業と会話授業で発音教育を継続しているかのように見えるが、この手のカリキュラムでは閲読に重きを置き、発音教育は軽視されがちであり、文法と言葉の意味の解説が多く、発音の訓練は少ないのが常である。つまり、適宜発音の矯正はするものの、科学的な発音の訓練は少なく、偏った方法だと評価せざるを得ない。これらは外国人（特に日本人）の聞き取り能力を読み取りの能力よりも低いレベルに停留させている。筆者は、開始部分での何週かのピンイン教育は必須であるが、これは任務の重い発音教育の手始めにすぎず、決して完成ではないと判断する。外国人が中国語を学ぶ過程において、発音問題は長期的に存在するものであり、「字」の発音の問題だけではなく、語句とイントネーションの問題である。従い、発音教育はある1つの段階だけの教育ではなく、何段階にも分けて長期的に教えていく過程なのである。

第二としては、発音教育の重点ポイントを明確にすべき、ということである。中国語の発音教育は母音・子音・声調の3種類の教育を含むが、それぞれが難点を持っており、これが教育での重点ポイントとみなされる。ここで強調したいのは、(1) 上述した3者の中では声調を重点ポイントとすること、(2) 声調では語句の声調を重点ポイントとすること、(3) イントネーション教育を重視することの3点である。

声調の重要性は、まず異なる字の意味（単語の意味）を区別できることにあり、これが最もはっきりとした区別機能を持つことである。音声学学者の実験によると、伝播状況が悪い環境或いは声がゆがんでしまう状況下において、音節・子音・母音は非常に聞き取りにくくなるが、声調だけははっきりと保持され、伝えたい情報を聞き手に聞き取りさせることができることが証明されている。これは声調が非常に強い抗妨害能力を有しており、言語の聞き取り度を高める方面で、何物にも替えがたい重要な作用を

持っていることを明らかにしている。次に、外国人にとって母音・子音・声調のうちで最も難しく覚えられないのは声調であり、しかも「外国人訛り」を形成してしまう場合、肝心なのは子音と母音でなく、声調とイントネーションにあるということであり、これは逆を返せば中国語を学ぶ上で声調が非常に重要であるということを証明している。従い、外国人に如何にできるだけ早期に中国語の声調意識を持たせるか、如何に語句の声調とイントネーション教育を強化するかにより、外国人の話す中国語会話のつなぎ語句と流暢さの問題を解決させること、これがまだ解決できていない重要課題となっている。声調とイントネーション教育は発音教育中の重点ポイントである。

第三は、実用的な発音教育方法を持つべきだ、ということである。発音教育を適切に行うために、一般的な発音教育の方法と手段(視聴覚教育を含む)の他、漢字の特色を利用して下記のように発音教育を進める方法もある。

1. 音符代表字。漢字の中には大量に形声文字が存在し、意符は意味を表し音符は読み方を表す。音符には子音や母音の読み方が含まれるため、音符代表字を利用して漢字の読み方を記憶していくことが可能である。例として、

嬰(yīng): 櫻、纓、鸚 (嬰がこれらの字の音符代表字)

善(shàn): 膳、蟾、繕、鱔 (善がこれらの字の音符代表字)

2. 声調代表字。四声には24の組み合わせがあり、1組に4つの字を代表として挙げ、声調教育の基準としている。発音の難度及び第三声が言葉の流れの中で変調を起こす場合、24種の組み合わせの中で最も声調を正す「声調代表字」となるのは「2・1・4・3」(ˊ ˋ ˋ ˋ)の組み合わせである。例えば、「学说汉语」の4文字は、第一声と第二声の連続と第四声と第一声の連続の難しさを避けられているばかりではなく、更に第三声を最後尾に置き、第三声本来の安定性を保証できており、真の意味で声調を区別し正す作用を持っている。^⑤

3. 常用する言葉の声調をしっかりと身につけること。声調教育に於いて学生に一定の常用言葉の声調を丸暗記することを求め、学生の声調意識を養うことが必要である。学習とはある種の記憶であり、この要求がなければ声調教育は目的達成が難しくなりがちである。

第四として、声調・イントネーション教育専門の教材が必要である。現

在ある中国語ヒアリング・会話教材は多くが総合的な教材である関係で、中国語学習において声調とイントネーションの学習は比較的弱くなりがちである。この点からも実用性の高い中国語声調とイントネーションを専門とした教材が必要であると考え。この種の教材は声調・イントネーションと会話を有機的に結合させ、教材の内容に対話・短文・声調とイントネーションの聞き取り訓練を入れ、外国人の声調・イントネーション学習の難しい部分に視点を当て、間違え易い類型を題材（要録音）として設けることで間違いと正確な発音の区別ができるようにするべきである。

以上述べたところを総合すれば、日本人の中国語学習にあたり発音の間違いは多方面にわたるが、それらは他国の学習者とはっきり異なる点がある。中国語の発音教育は複雑多岐に渡る教育であり、我々が更に探究していかなければならない問題もまだまだ多い。

二、中国漢字の書き方でよく見られる誤り

中国語教育界では、漢字を書くことが外国人学生の「ハードル」となっており、かなりの力を投入しないとこの「障害」を克服できないということが公認の事実となっている。聞いただけで顔色が変わる程のこの「ハードル」は難易度が非常に高い障害物ではあるが、これは主として欧米人にとってのことであり、日本人にとっては状況が異なる。というのも、日本は「漢字文化圏」内であり、日本人は漢字を書くルールは容易に掌握できるからである。従い、漢字を書くということにつき、中国語教師は欧米人学生には気を付けて指導するが、日本人学生に対してはこの点おろそかになり、ともすると見くびって油断をしてしまうことになる。又、日本人学生は日本語にも漢字があることで、漢字を書く基礎が欧米人より「上である」ことに頼り、如何に正確に中国漢字を書くかということに対し、気にも留めていないという状態に陥る。予想だにしないことではあるが、この問題については、教師も学生も「うかつにも荊州を落とす（三国志故事）」となっている状況が起こっている。筆者は教育の実践の中で、日本人にも中国漢字の書き間違いが決して少なくなく、その特徴は欧米人とは異なるものであるという実態に目をつけた。

欧米人が漢字を学ぶことは、ある意味で新鮮な事物を受け入れるということであり、心理的に良い意味での衝撃を受けるが、認知や記憶が障害に

遭い、戸惑ってしまい、明確に覚えることができないのが常である。欧米人が漢字を書くにあたりよく犯してしまう誤りはおおよそ下記のいくつかに分けられる。(1) 組み立ての混乱。例：「努」→「勢」(2) 組み立ての位置が移動してしまう。例：「叫」→「叩」(3) 組み立ての喪失。例：「語」→「吾」(4) 画数の増減。例：「安」→「安」・「英」→「兎」(5) 変形。例：「蓋」→「着」(6) 構造の誤り。例：「喂」→「喂」(7) 同じ音の字との取り違い。例：「園・圓」との混同。(8) 音の混同による書違い。例：書取時に「人民」を「人們」と書き間違えることが起きてしまう。

欧米人は上述の間違いを犯し、漢字に対してひるんでしまうというところがあるものの、漢字の書き方を学ぶにあたっては一般的にとっても慎重で、手抜きをせずに真面目に取り組む。ところが日本人は明らかに異なり、漢字とは「旧知の仲」で、ともすると「手慣れたもの」という錯覚に陥り、漢字の練習は面倒だと感じてしまい、結果として欧米人とは全く異なる間違いを犯すことになってしまう。日本人学習者の中で欧米人学習者とはほぼ同じ間違いを犯す比率はわずか10%ほどであり、ほとんどの日本人学習者は別の性質の間違いを犯す。簡単に言えば、欧米人学習者の間違いは基本的に新しい事物を受け入れるときの「困難」さによるものであり、日本人学習者の場合は「熟知」している相似した古い事物が新しい事物を受け入れる際の「妨害」となっていることによるもの、つまり日本語の影響を受けているがためであると言える。筆者は授業時に日本人学習者が中国漢字を書くにあたっての主な誤りを6種類に分類した。うち下記(1)～(4)の4種類は日本漢字の書き方の妨害を受けているものであり、日中の漢字を一つ一つ対応させて証明してみた。下記の例でハイフンの前が中国漢字、後ろは日本漢字としてある。下記(5)と(6)の2種類はその他の原因によるものであり、ハイフンの前が正確な中国漢字、後ろに学生の書いた間違いを配置した。

(1) 画数の増減

歩一歩	対一対	帯一帯	況一況	減一減
涼一涼	決一決	淨一淨	浅一浅	收一収
器一器	桌一卓			

(2) 変形

所一所	边一辺	船一船	团一団	写一写
舍一舍	黒一黒	画一画	角一角	別一別

旅—旅	判—判	春—春	微—微	推—推
反—反	今—今	低—低	戸—戸	真—真
置—置	化—化	处—处	强—强	

上記2種類の間違ひはすべて日中の漢字の細かい差に気づかず、日本の漢字と同じだとの思い込みによるものである。ここで注意したいのは、これらの日本漢字の多くは中国漢字の異体字であるということである。例として「況決処強」等である。しかし、我々教師は日本人学習者が書いたこれらの漢字を中国漢字の異体字ととらえるのではなく、彼らが書いているのは日本漢字であることを識別し、中国漢字の書き間違いだとみなさなくてははいけない。

(3) 習慣的書き間違い

长—長	习—習	鱼—魚	风—風	园—園
师—師	馆—館	绍—紹	场—場	热—熱
迟—遲	乐—樂	济—濟	乘—乘	预—予
图—圖	劳—勞	气—氣	广—廣	

上記の日中の漢字の組み合わせは、構造上の一部分が同じであるが故に学習者の中国漢字に対する認識が甘く、習慣的に日本漢字を書いてしまうものである。このタイプの書き間違いは注意する必要がある。というのもそれらの多くの一部は中国漢字の繁体字であり、また一部分は繁体字と非常に近いことから、これらを香港と台湾漢字の影響を受けて中国の繁体字を書いているのだと勘違いさせ、書き間違いだと思わせないことを引き起している。その実日本人学習者が書いているのは日本の漢字なのだが、教師がこれを理解せず、長期的に誰も正さないことで根強い習性となり、改めようにも改められなくなってしまうわけである。

(4) 表したいことはわかってはいるものの犯し易い書き間違い

坐—座	树—木	书—本	鞋—靴
脸—顔 (顔)	菜—料理	报—新聞 (聞)	
经历—経験 (経験)	情人—愛 (愛)	人	
火车—汽車 (車)	工厂—工場 (場)	蔬菜—野菜	
结实—丈夫	行李—荷物	孩子—子供	
优点—長所 (長所)	电影—電映	现代化—近代化 (化)	
画地图—写地图	交作业—提出作业		
自行车—自転車 (車)			

(説明：カッコの中の漢字は日本漢字である。日本人学習者が考えていることを表現したいときに使うのは日本語の単語であり、その単語を書く時に、ある者は日本漢字を書き、ある者はそれに相当する中国の簡体字を書くこともある。筆者はそれを同時に挙げることにより、日本人学習者の脳裏に浮かぶのは相変わらず日本語であることを示した。)

これらの間違いを犯す状況は比較的複雑であるが、いずれも中国語の単語に替わって日本語の単語を乱用している点で共通している。一部の日本語の単語は中国語にも存在しているが、その意味は全く異なる。ある日本人学習者は試験時に、自分で表現したいことは何かわかってはいるものの、その場合に使う中国語の単語が浮かばずに、とりえず同じ意味の日本語を書いてしまうことがある。例えば「顔(顔)」や「荷物」を「臉」と「行李」に代えて使ってしまうこと等である。ある学習者は日頃から真面目に学習に取り組まず、相当する中国語を覚えていないために、文を作る際に習慣的に同じ意味の日本語を当然のように使用してしまう。例えば「本」・「新聞」を用いて「書」・「報」を表すことが挙げられる。又、ある学習者は考えたことを表現したいのだが、使いたい中国語はまだ未学習である、だがどうしてもそれを表現したい場合、やむを得ず同義か意味の近い日本語の単語を用いて表現することがある。例えば「丈夫」や「経験」を「结实」や「经历」の代わりに使うといったことが挙げられる。そのほか、連想からくる間違いもある。例えば「电影」を「电映」に、「画地图」を「写地图」と書いてしまうことがその例である。「电影」は日本語では「映画」であり、中国語では「影」と「映」の発音は近いため、結果「电映」と書いてしまうことになる。「画地图」の「画」と「写字」の「写」は、日本語ではいずれも「書く」であるが、日本人は習慣的に「地図を書く」と言い、もう一つの「画」の意味の「描く」は使わず、「地図を描く」とは言わない。従い、日本人が「地図を書く」という表現を考える時、まず自然と頭に浮かぶのは「書く」という動詞であり、その際にこの学習者が「書く」を「写」と変換することにより「写地图」が出来上がる。更にこの学習者が日本語の「書く」は中国語の「写」であることしか知らないか或いはそれしか覚えていない場合(というのも「写」は「画」よりも多く使用し早い段階で学習するのが常であるため、この状況はかなりの確率で起こる)、「写地图」となる間違いが起こる。

(5) 読み方の混同による間違い

- ① 柏树—拍树 大一他 口一个 旧一去 庄稼—传家
② 积极—织极 墙—常 小—少 热—乐
③ 放—还 (huán)
④ 忙—慢 正—钟 脱—偷 去—七 学—写
 有一用 忘了一完了 豫园—语言
⑤ 扔—仍 那—哪 刻—棵 年—念
 私人—死人 通知—同志 梅花鹿—美华鹿

上記の間違いは発音が不正確であるために起きる書き取りの間違いである。読み間違いは子音・母音・声調のどの部分でもあり得る。子音では、日本人にとって中国語の中の6種類の有気音と無気音 b-p, d-t, g-k, j-q, z-c, zh-ch の区別が難しく、よく聞き間違える関係で上記①のような書き間違いを犯してしまう。日本人学習者は j/q/x と zh/ch/sh, r と l の区別も難しいため、よく②のような間違いを犯す。又、日本語には唇歯音の f が無いために、日本人は「fu」の発音が特に難しく、よく「hu」の音で発音してしまう為に上記③の間違いを引き起こす。母音では、日本人学習者は an-ang, eng-ong, uo-ou, ü-i, üe-ie, iou-iong, uan-uang, üan-ian の区別がとても難しく、上記④の間違いを引き起こす。声調では、日本語に四声がないため、日本人学習者は四声の把握が難しいと感じ、声調の不正確から書き間違いをし、上記⑤のようになってしまう。上記の例から明確にわかるように、多くの間違いは単に1つだけの原因が引き起こしているとは限らないのが実情であり、いくつかの複雑な原因が絡みあって起きているものである。例として「去—七」は上記④と⑤の間違い、「庄稼—传家」の「庄」と「传」は上記①と④と⑤の間違いが絡み合っていることから起きている。

(6) 書き方の間違い

去—去 等—等 没—没 名—名

上記の漢字の「間違い」は甘くみれば間違いとは言わないが、何か違うところが目に付く、いわゆる「異国情緒」の漂う字である。日本語の辞書では、これらの漢字の印刷体と中国語の印刷体は同じである。但し、ほとんどの日本人が「ム、竹、彳、ク」といった部首のある漢字を書く時には上記のように書く。筆者は1つ実験をしてみたことがありご紹介したい。20余りの「ク」のつくりを持つ漢字を10人の日本人学習者に書いてもらったところ、9人が「ク」を「𠂔」と書いた。なぜであろうか？ 1つは日本の仮名の書き方の影響を受けたのではないか、例えば「彳」を「ㄣ」と

書くこともよく見られる。もう1つは日本人の書き方の習慣と書き方の風格がこうさせていると言えるのではないか。

日本人学習者の書き間違い6種類のうち、画数の増減・変形・音からくる書き間違いのどれをとっても欧米人の間違いとは明らかに異なっている。いずれにせよ、上述の6種類の間違いを直すために下記の方法を提案したい。

1. 中国漢字と対応する日本漢字の比較対照をきちんと行い、日本人学習者に間違いを犯し易い箇所を細かく指導する。

2. 学生が同じ意味の日本語を以て中国語に代えようとする状況については、まず日本人学習者が表現したい考えを明らかにし、相当する中国語単語と日本語単語の比較を行う。もし学習者の使いたい日本語単語が中国語にもある場合には、更にその言葉の持つ異なる意味を詳しく説明する必要がある。例えば中国語の「菜・臉・鞋」を日本人学習者は「料理・顔(顔)・靴」を用いて表してしまい、その意味が全く異なってしまう。又、学習者に簡体字を書くように厳しく要求しなければならず、もし学習者が異体字や繁体字を書いた場合には、まず「間違い」として扱い(理由は前述)、学習者にこれらは中国漢字の異体字や繁体字であることを解説し、現在では一般的には使用しない旨教えなければならない。

3. よく書き間違い漢字の部首と画数に対しては、特に取り出して比較分析を行い、学習者に正確な書き方を伝えなくてはならない。例えば、「推」の「主」・「春」の「𠂔」・「卷」の「𠂔」・「反」の「𠂔」の「一」等は、日本人はよく「主、𠂔、𠂔、一」と書くが、これらについては学習者に中国漢字と日本漢字の書き方の違いにつき細かく示す必要があり、中国漢字の書き方に沿って書くように改めなくてはいけない。

4. 発音の不正確さによる書き間違いについては、まず発音の矯正から入らなければならない。(1) 日本人学習者が区別が難しいと感じている組合せを比較分析する。(2) 特定のピンインの発音と日本語の中の音の近い仮名の比較を行う。例えば「fu・su・hen」と日本語の「ふ・す・へん」を日本人は前者を後者の音で読んしまう頑固な癖があり、重点的に矯正を入れなければならない。

日本人学習者の中国漢字の書き方にこのような大きな問題があることは、母語である日本語の影響を受けていることに起因しているとしても、我々中国語教師の教育方法にも欠点があることを否定はできない。今の中

国語教育システムの中で、漢字教育はまだそれほど重視されておらず、それは(1) ふさわしい教材のないこと、(2) 独立した漢字教育授業が設置されていないこと、によく現れている。現在の漢字教育は一般的に閲読の授業に組み込まれているが、明らかに授業数が不足している。長期に渡り、教師も学習者も話すことを重視し書くことを軽視する考えが強く、学習者が中国語の学び方が適切であるかどうか・早いかどうかを判断するには「話せるのか」・「どのように話せるのか」ばかりを重視してきた。中国語学習者の多くは就職の為という実用主義の傾向が明らかであり、中国語学習の中で「聞く・話す」を重視する姿勢は「読む・書く」を大きく上回っている。このような偏った考え方が多くの人々の考え方に影響を与えたのは根源にある実用主義以外、長期的に中国語の文の構造中の漢字の地位に対する認識不足があったことに他ならない。

中国語学習者は、中国語の文の構造を重視し、学習者は早くそれをマスターしたいと思うのは当然のことである。それでは文の構造と漢字は一体どのような関係があるのか、多くの人は明確にわからない。もしこの問題をはっきりと説明できるのであれば、漢字を重視していない人でもその考えを改めるであろう。中国語の文の構造については、まず当然中国語構文の基本単位の分析から始めなければならない。古代においては、文法の問題は熟読を通して「悟り」そして解決するものであり、伝統的な「小学」は字形・字音・字義のみの研究を行い、文の構成や文法を研究する学問ではなかった。中国の言語学は19世紀末以前は文字学と音韻学と訓詁学であった。19世紀中葉以降、多くの西洋宣教師が中国に布教に渡り、それらの宣教師たちは自身の中国語学習の過程で西洋の文法理論で中国語を研究し中国語文法についての研究を著した。中国人による最初の中国語文法の著作である「馬氏文通」はこのような流れの中で編纂された。この「馬氏文通」が世に出て後、インド・ヨーロッパ語の文法理論が中国に伝えられ、中国の語学界は次第に伝統的な理論を放棄し、「単語」を基本単位として中国語文法を研究していくこととなったが、このような研究は時に下記のような問題を引き起こすものである。それは、文の構造の理論背景や構造基礎の問題を討論する場合「単語」を基本単位として討論するが、構造単位の構成を討論する時には中国語の音節構造規則の重要作用をやむなく強調せざるを得ない、ということである。この重要な作用とは書く際の符号として表現されるが、これこそが漢字の重要な作用となり、前者では

「単語」を、後者では「字」を単位とするという点で統一性がとれていない。^⑥このような言語理論と言語事実の矛盾は長期的に中国の語学界を悩ませてきた。その実、四十数年前に趙元任氏は中国語の文の構造の基本単位は「字」であり「単語」ではないことを探りあてている。趙氏は論文「中国語単語の概念及びその構造とリズム」の中でインド・ヨーロッパ語の word (単語) は、文の構造の単位として「中国語の中ではそれにはっきりと対応するものはない」又「英語を話す人が word という場合、中国語を話す人は『字』を思いつく」と明確に指摘している。趙氏は大量の言語関係事実に基づき「字」と「単語 (word)」の相似性と相違点を分析し、導いた結論は、「単語」を単位として中国語を分析するのは役に立つかもしれないが、「しかしこれは中国人の思考方式ではない。中国語では単語という意識が弱い、少なくとも最近まではそうである。中国人の観念の中で『字』こそが中心テーマであり、『単語』は補助的なものであり、中国語の音節リズムがこの形式を決定した。」と述べている。^⑦

長期にわたる中国語研究の紆余曲折を経て、中国の言語学界も最終的に元に戻り、伝統である「字」の理論研究に立ち返ることとなった。再び中国語の構造における「字」の地位を認識し、現代言語学の理論と方法でその性質と作用を研究し、伝統的な手法と現代的な手法を結合して中国語の研究を進めている。趙氏が言うところの「中心テーマ」は言語の構造本位であり、即ち中国語の構造は「字」本位であり、「字」を基礎として文の構造の研究を進めていかねばならないという意見もある。「音節」の作用に啓発されて「字」の作用を発見して以来、ある研究者は「中国語の基本構造は伝統的にいうところの『字』の中に隠されている。「字」に代表される言語現象は、中国語の音・語彙・語義・文法の合流点であり、『一つの音節・一つ概念・一つの単語』の一対一の構造関係を含んでいる。中国語の文の構造はこれを基礎に展開している。」^⑧と認識している。本文の主題は文法問題の討論ではない為、上記のような観点が正確であるか否かについては言及しない。筆者は以上の観点をを用いて「字」が中国語の基本構造の単位となっている、ということを強調したいだけであり、中国語の文の構造を理解し掌握する為には、まず一つ一つの漢字を理解し掌握しなければならないということを明記しておきたい。

「字」が中国語の基礎であり、中国語研究にとっても重要な作用をもつのであれば、中国語学習者にとっては更に重要ではないだろうか？ 漢字は

形・音・意味の統一体であり、一つの字を完全に理解し覚える場合にこの三者は必ず必要である。「字の形」を覚える最も有効な方法は「書く」こと、しかも「正確」に書くことである。このように漢字を書くことは中国語を学ぶ外国人（当然日本人を含む）にとって決しておろそかにできない重要な意義を持つものである。漢字を書くことを軽視する間違った観念を徹底的に改め、漢字の書き方について存在する問題をなおざりにするわけにはいかないのである。

注釈

- ① [日] 長谷川良一「为什么日本学生最难掌握的是汉语声调」,『中国語文』, 1990年第6期
- ② 郭锦桴『汉语声调语调阐要与探索』, 北京语言学院出版社, 1993年
- ③ [日] 長谷川良一「为什么日本学生最难掌握的是汉语声调」,『中国語文』, 1990年第6期
- ④ 趙元任『汉语口语语法』P. 369, 商务印书馆, 2005年
- ⑤ 胡炳忠「基础汉语教学中的四声连续练习」,『对外汉语教学论集(1979-1984)』, 北京语言学院出版社, 1985年
- ⑥ 徐通锵「“字”和汉语的句法结构」,『世界汉语教学』, 1994年第2期
- ⑦ 趙元任『中国现代语言学的开拓和发展——赵元任语言学论文选』, 清华大学出版社, 1992年
- ⑧ 徐通锵「“字”和汉语的句法结构」,『世界汉语教学』, 1994年第2期

Examples of Common Errors among Japanese Students in Chinese Language Learning

WANG Youmin

Common mistakes made by Japanese in Chinese language learning are different from those made by Europeans and Americans. Based on many years of teaching experience, the author illustrates common mistakes made by Japanese students from two aspects: pronunciation and Chinese characters, and through the comparison of Chinese and Japanese languages analyses the causes of the errors and ways to correct them.

In terms of pronunciation, there are consonants, vowels and intonation errors. At present, there are two misunderstandings in phonetic teaching: that phonetics can be taught in a short period of time, and the lack of highlights in phonological teaching. The author puts forward four suggestions for improvement of these two misunderstandings.

Japanese students make many mistakes in writing Chinese characters, furthermore these mistakes are different to students from Europe and the United States. The author has identified six categories for these errors, mainly caused by the interference of Japanese Chinese characters.